

紅提灯

泉鏡花作

一

四谷見附から番町へ入る處に、境内は廣い、が小
さな稻荷様の堂がある・・・毎月、月がしらの
三日が居まはりだけの縁日で、煎豆屋、飴屋、おで
ん屋など三四軒。固より見世もの、植木屋などの出
るほどではないが、宵のうちには二十五座の催もあつ
て一寸賑ふ…

時に、殿井と云ふ、郵便局へ出勤して、澤山上級
の方でない處を勤める、月給も、身上も氣も軽い、
年紀は二十六七と云ふのが、件の稻荷堂で、フトし
た思ひがけない事に出會つたのは、矢張り宵のうち
賑かだつた、其の初夜過ぎて、境内の寂寞した時で
ある…

けれども、其の夜は、例の三日の縁日の晩ではな
い。

四四月の末で、此の境内に見事なのが、七重七本、八重八本、九本十本に餘る・・・おくれ咲の山櫻の眞盛に、つい近所の、或工場の職工だちが思立ちで、旗、提灯に景氣を付けて、神樂堂で茶番の興行をした當夜。

殿井は四谷の通へ、用達しの行掛けに、咲揃った櫻の下に、ふら／＼と推懸けた群集の上に、トばつさり裂けた蛇の目の傘。顔も胸もべた／＼と眞白に塗つた、黒羽二重に朱鞘を落して、ギツクリと百日かつらの首を掉る、と故とか、粗相か、笠ばかり仰反つた形が見えた、尻餅支いた與一兵衛の袖の下に、小田原提灯が、めら／＼と蒼味も交つてニと燃えたのを、丁ど見た。

人動揺みで、わツと云ふ。

其の光景を、可笑く、寂しく、もの可懐くも視めて立停まつたが、前途を急いだので、件の茶番の舞臺を左に・・・其の夜はどんよわと曇つた空の、星一ツない雲の中まで煉瓦でづツしりと仕劃をつけ

た、なにがし女學校の高塀を右に、人通りは早くも
途絶えた裏町から、見上げるばかりの火の見櫓の暗
い下を、紅に、萌黄に、電燈の火花の散る、四谷見
附へ出たのであつた。

些と手間が取れて、築地に行く電車の灯の眞蒼な
の、と一所に成つたので、寄つて見よう、歸途には、
と心がけた、其の茶番の催は疾うに濟んで、境内の
入口から、暗夜ながら、咲揃つた八重櫻の花の影に
ほのかに白い、廣々とした境内の空地を覗くと、大
百の鬘めく神樂堂の屋根が廂下り、で、黒々とした
柱の形が、行途に見た定九郎の俤を留めて、ぬつく
と立つのみ。燃えた提灯の煙かと思、夜の霞の餘
波も見えぬ。

月々の神樂の時さへ、恁う早く群集が落果てよう
とは思はなかつた、が、氣が着けば空模様。

今にも、ぼつりと來さうなのである。其のためか、
花片を誘ふ風もないのに、人は逸早く散々に成つた
らしい。

と思ふ・・・殿井がイんだ、生垣の彼方に、
ほた／＼、と重い媚めかしい・・・傳へ聞く、
遊女が棲捌きをするやうな、寂しくうつとりとした
音がする。

氣勢が眞紅で。

雨垂ではない、其處に一本、片側續の武者窓づく
りを昔のまゝの門長屋の屋根より高い、大木の椿の
花の燃ゆるが如く咲満ちたのが、夜露と共にこぼれ
るので、日のうち、見馴れた目には、パラリと溝石
の上に碎ける色さへ、幻ながら描かれた。

稲荷の御堂は、路傍に近く、件の生垣を一重隔
て、其なる椿の樹の蔭に――木の芽の重なつ
た暗さを透いて、そして未だ幽ながら灯が點れる。

「寄つて参詣をしよう。」

と思ふと、入口に、提灯は最う抜取つたが・・・
 ・雨覆を掛けた黒塗の、あの高張の臺柱が、朦朧
 と立つて、笠の下からぬいと細長い手を出して小手
 招きをするやうに見えた。・・・其も神樂堂の
 茶番のあとで、もの凄いほどではなく、百鬼夜行の
 滑稽けた門番、見る目に漫ろに微笑まれつ。

さて、生垣の裏へ廻つて、背丈ばかりの鳥居を一
 ツ、櫻の露の点滴に、手洗鉢の灯は最う消えた、が、
 花片が軽く積つて、取る手に重い柄杓の柄に、搔分
 けて掌に掬んで、最う一つ鳥居を潜る。

二間がほどを次第に低い、三ツ目の鳥居の際に、
 豆腐田樂が化けた風な、ぼやけた行燈が一ツ。青竹
 に掛つて消残つて、唯見ると、ふつくり、圓々つち
 い紅さした頭を横傾げに、三つ竝べて、葉と葉を紙
 雛の袖に合はせて、斜ツかひに、こち／＼擦つたさ
 うに肩を揃て、泳ぐ形で、薄灯にふはりと浮いて、

翻々と飛びもしさうな、酸漿の繪を紅彩色。で、上に散らして、

「ほゞづき様幾つ 〓 〓 と記してあつた。」

「はゝあ、お月様幾つだな。」

と、句も、其の心も、優しく、仇氣なく、罪のない、可愛らしさが、何となく花の明を添へて、ほんのりと殿井の瞳に映つた。

十七ばかり、島田ざかりの色の白い、美しい娘で、――殿井の女房と見知越、町の湯などで、

「今晚は 小母さん。」

と挨拶する 女房は今年二十四五、十七から小母さんは、些と役不足とあるべき處を、對手の可愛らしさに、つい釣込まれて。

「はい、今晚は。」

と博多節の切で行つて莞爾だと聞く。 心からなり、玉の膚の清らかさ、透通る耳許まで、
境界で評判のお米さん。

《一江戸兒一だから聊か侠、前垂で隠しもしない
で晝間、こゝへ店を出す・・・蜜豆を買ひに行
く・・・と其も評判。

で、宵の内の、茶番に群集した中も、あつちこち、
其の角絞りの緋手絡が、花の色に、ちら／＼照映え
たであらう、と思ふと、 〓 〓 ほゞづき様幾つ

と云ふのが、其のお米さんの風情に見える。

が、初々しい、派手な、花やかな中にも、ぱつち
りした目の涼しさにさへ、朝顔の藍にも勝る、秋の
あはれの、もの寂しさが、消残つた地口行燈の、鬼
灯の色にも出たのは、近い頃、長煩ひが、とげ／＼
しい春寒の刃に切れて、其の娘の父親が、世を去つ
て、母親ばかりと成つた事を、近所づからよく知つ
た殿井には、然うしたお米の行末さへ、豫て案じら
れて居たからであつた。

目を外らすと、灯はなしに、同じやうな行燈が、
所々、寂しい窓のやうに暗がりにおいて、花の顔が、

どれからも皆覗く。

犬であらう、 鳥居の奥の祠の横手、椿
と生垣と押重なつた、漆のやうな眞暗な中に、がさ
／＼と音がした。

殿井は祠の正面を左へ避けて、鈴の紅白の綱の傍
に、鳥打を脱いで立つた。寶錢箱のうしろに、燻つ
た眞鍮の、寶珠の珠の形した蠟燭立の裾の處に、只
一挺、其もやがて殘少なに、殘燈めいて、じり／＼
と鳴つて、淺葱に、黄を交せて、薄赤う、蠟燭が點
いて殘る
唯これだけで、何も見えず、―― お供物の三寶が、
三ツ四ツ茫乎として、壁、廂を漏る月の、それも朧
の影らしい。

が、何處かに、ものゝ氣勢がする。

殿井は、何故か、雨垂が掛つたほど慄然としなが
ら、

「お蠟燭を。」

と聲を掛けた。が應答がない。で、何も居ないか
と思ふと・・・然も居る。そして、其の白木の
三寶の竝んだ背後に、鼠には大い、猫には
：否、
小狗ほどな影が取留めもなけれども微に映す。妙に
不氣味で、其のまゝ後退りに成りかけたが、御堂に
向つて一旦申出でたものを、・・・今度は、賽
錢箱の角越しに、裡を、蠟燭立の金枠から覗込むや
うにして。

「お蠟燭を願ひます・・・」と云つた。

トぬいと其の蠟燭立ての向うへ出た顔が。

頭のげつそりと瘦せた、衝と隆い鼻の尖に、齒の
ない口を、もぐ／＼と行る。唇が一つに成つて、く
な／＼としながら、顔なりにづいと突出た、獸も同
然、七十にも餘んぬらむ、翁か、媪か、一寸見ては
差別が着かぬ。・・・眉毛は見えずに、たゞれ

目らしい、べろりと剥げた血のやうな赤い脛を、し
よんぼりと細めたのが、其の鼻の附元から耳際へ掛
けて、逆さづりに、きり／＼と上釣つた・・・
白髪の散斬、すく／＼と針を植ゑた、皺黒く黄味が
かつて、べた／＼と茶の浸點のある、蒼ざめた細い
顔で・・・

向つて真正面の蠟燭立、殿井が覗いたのと、先方
で擡げたのと、驚破、恰も其の尖がつた鼻と鼻を突
合はせる。

通夜の夜のしら／＼あけかと思ふ、強い、蠟燭の
香がじり／＼と脳へ來て、殿井は思はず氷のやうな
汗を流した。

其の灯のまた／＼く影に、瘦せた蒼い頬が、ひく／
＼動いて、

「よう、御參詣にござります。」
とほけた聲。ものを云ふのに、唇が上下内側へ捲
れ込む。

「お世話ですが、お蝋燭を願ひます。」
突弾かれたやうに顔を引込ませた殿井は、尋常な
聲が出たのに自分で感心をしたくらゐ……尤
も少なからず敬遠の意を表して、慇懃に會釋をした
のは言ふまでもなく、臆病な男である。

「はい、はい、是は御奇特な。」
と云ふ、二度目の聲は最初より判然して、

「其の何でござります、御參詣が立籠みましたで、
お生憎な儀で、お蝋燭は悉皆に成りましたが、なう。」
と目皺を刻んで、殿井の顔をじろ／＼と縦に睨む
だ。

「一議もあらず、遁構へで。」
「是はお邪魔を、」と退つたり。

「やれ。」
と引留め、
「ぢやが、お待ちあつせい。此處な邊に、まだ一
挺や二挺は残つゝろ。……捜いて見申そ、捜
いて見申そ。」

「否、別に……」

「お待ちあつせい。」

と聲を掛けて、

「搜いて見申そ、搜いて見申そ。」……と

今度は獨言のやうに、例のむぐぐと唇を捲き込み
／＼、身體も疊みさうに、ぐな／＼と成つて、蠟燭
立から顔が消えた。

其の寶珠の珠の形をしたのが、恰も眞暗な、底の
知れない横穴のやうで、底にかゝつた怪しい姿見に、
背後から――殿井は自分が立つた背後から――

肩越しに不思議な顔を映したのであるらしく、フ
ト考へた。

主は對うに居るのではない、其の背後の、鳥居の
上にも居はしないか、と思ふばかりで、振返る處
か、身動きも、さて出来ぬ。

四

震聲ふるへいで、

「如何いかですか。」

と少刻しばらくして促うながして見みた。が、返事へんじがない。唾つばを呑のみ、唾つばを呑のみ、又頃刻またしばらくして、

「なければ可いいのです、なければ可いいんですよ。」
と云いふ。

寶錢箱さいせんばこへ投なげたのが、カランと響ひびいて、カンノ、と鳴なつて、深ふかい井いの底そこへ、石いしの側かはへ當あたりながら、ものゝ落おち込こむ音おとがした。

はつと又また此これに吃驚びつくりして、箱はこの角かどに搥つかつて、

「最もう可いいんです、何なにをして在いらつしやるんだ。」

ト直ぢき其處そこに聲こゑがした。

「鼠ねずみがなう、荒あれて荒あれて、黄金升こがねますの米よねを溢こぼすによつて、番ばんせぬ事ことには成ならんで、なう。」

と、もそノ、と聲こゑを包つんで、ぼやりとした影かげが映うつり出す。矢張やはり堂だうの中うちに、寶珠ほうじゆの蔭かげに居ゐるらしい。

吻ほっと息吐いきついて立直たちなほつた。

はじめて心着いて、鈴をと、棟はづれに、仰向けに胸を反らして、廂を包むほんのりと薄紅の櫻を見た。而して、花ながら枝を絞つて、すら／＼と下げたやうな紅白の緒を引くと、鈴がころ／＼と鳴つた時、殿井はフト自分の住居の格子戸を開けて娑婆へ還つた心地に成つた。

「何だ！・・・」

上りが八里、人跡經えた峠の辻堂に來たではなし・・・番町の我が家でも、ものゝ三町とは間がない。二階から見附に見えるそれ／＼火の見櫓。さて其處に立つ・・・地口行燈の酸漿もまだ消えぬ。

何の怪しい事があらう。

「お爺さん。」

と、こゝで氣安く、可加減に呼んだつけ、しかし聲はまだ陰に籠つた。

「最う可いんですよ・・・そんなに捜して頂くと、提灯が消えて蠟燭を買ひに入つたやうで、御堂を荒もの屋と間違へたらしく成つて濟みませ

ん。……故と此のまゝにして、歸ります。「
云つても壁があるばかりで、人間らしいたよりが
ないから、

「ぢや、御免下さい、失禮します。」

「お待ちあつせえ。」

と筒抜けに、蠟燭立から迸つて聲が出た。

途端に、燃さしが舐めて取つた體にフツと消えて、
殿井は又ぎよつとしたのみならず、此の聾を聞くと
齊しく、魂が峠の上へ飛んだのである。

もぞ／＼として、形は見えぬが、尖り鼻、釣目の
翁は、今度は膝行出たらしい。

「まん、此處なてへ、腰なと掛けたが可うござり
ます……まそつとぢや、お待ちあつせい。」

「……」
此方は聲が出なかつた。

「いまに、お米も見えるでなあ。」

「何ですか、」

と、しどろに成つて、きよと／＼聲で、

「此處へ見えますと……お米さん、と申しますと……」

つい、又謹んで訊くのであつた。

「近所の、美しい娘ぢやが、主は問ふまでもあるまいが。」

「はあ、お米ちゃん、あの娘が、此處へ？」と云つた、半ば、咳くやうにした。殿井は、氣を奪はれた體に、縁か、扉か、鳥居の柱か、背に當つたものに、ぐたりと凭れた。

「かれこれ、一時……此の夜中に、今時分……お爺さん。」

返事がない。

「お爺さん、何をして居るんです。」

堂の中に、もそりと音して、

「鼠がなう、荒れて、荒れて、黄金升の米を溢す

によつて、番せぬ事には成らんでなう。」

五

「其のお米さんと云ふ娘が、此の御堂へ来るんですか、お爺さん。」

「然ればい、来もすれば、升にもあるなう。」
「又こそ／＼動く。」

「お爺さん、何をしに……？ あの、矢張はり、お参詣に来るんですか。」

もし然うだとして、信心なれば、夜中途中が憂慮はれるばかりで、別に怪しい事もない、と考へながら殿井が訊いた。

「其處どころは分らんなう。」

「毎晩来ますか、日参でもするんですか。」

「違ふなう、今夜に限つた事ぢやがなう。」

「へい。」

「主あ仔細を知つてぢやらう。」

と堂の中から先んじて言ふ。

「私が仔細を。」

「知らいでかい、約束なれば逢ひに来る、何も縁

ぢや、なう。」

とばかり言葉じりを投げたやうに云つた。が其なり寂寞と静り返る。

殿井は、ふは／＼と浮いて来て、目前にちらつくかと思ふ行燈の繪の、赤い酸漿を視めて恍惚と成つた。

敢て何にも思はぬまでも、場所が場所、時も時、言ふものが言ふものなれば、前世もあるか、と身に染みるやうで、うつゝに来る人の姿が待たれた。

ト花の梢を、さら／＼と風の音。

「や、誑かされた！ 明方に天秤棒で撲られよう。」

で、慌しいまで、吃驚する、ト頸許から慄然とし
たが、ぼんの窪を敲いたやうな、唐突な、

「ハツ！」・・・・・・・・噫・・・・・・・

一息も留まらず、ハツ、ハツクサメ、ハツ、クシヨ
五ツ六ツ七ツハツ、馬鹿らしいまで、たて續けで、

イ、ハツと出る・・・
いや、我ながら餘りの事の淺間しさ。

「えゝ、」

と氣を入れて身を揉み／＼、うむと堪へて、吐出す臟腑を引摺みさうに、む、と兩手で口の端を壓へる、と・・・手答へして、スボンと音がするまで、皮ぐるみ竹の子を捏つたやうな手觸りで、驚いて一撫で撫でると、

「はツくしよん！ えゝ。」

頤ながら、唇ながら、鼻ばしらから、ぬい、と尖つて、持餘るばかり突出て居る。・・・
と思ふや否や、ひく／＼ひく／＼と動く、眉に連れて、キリ／＼と目尻が痙攣る。

口から鼻が、くわツとほてつて、じり／＼煮込む可厭な臭氣、だら／＼と蠟燭が溶けて流れて出さうで、一息も堪へられぬ。

伸びたり、窘んだり、爪立つたり、殿井は半狂亂

の體で、

「目が覺める。」

と心覺えの hands 水鉢に　ー　足も地につかず、
ふら／＼と成つて、ドンと取着くと、いきなり、兩
手で、ぼちや／＼と猫のやうに洗つたが、散り浮く
花片とは思はれず、ぬめらと、顔中へ何かへばりつ
くのが、其まゝ、べた／＼と茶色の浸點。

黄色く蒼く、ぶく／＼と、尖つた陰火の如く、自
分の顔が鈍く光る、と我ながら、赤たゞれにたゞれ
たらしい目に映つた。

「何事だ。」

とつい知らず、情ない聲を出して、蹠跟として、
鳥居に縫れて、のけぞるばかり、惱亂の拳を握る、
と命の綱よ、其の折なれば、鈴の緒に、掛つた手を、
放さじ、と確乎と取つた。

「お爺さん、神官、堂守の方……で、殿井はあらゆる名を呼んだが、内で返事もしなければ、南無三寶、馬かと思ふ鼻息荒く蠟燭くさい息ばかりで、ふか／＼と聲が出ぬ。

ト其の縋着いた鈴の緒を、一生懸命に揺つて曳いた。

何時か、瞼を合はせたやうに格子もぴたりと閉つて居た。

が、冴えた鈴音高らかに、から／＼から／＼と空に鳴る。其の、鳴るのを聞き／＼、殿井は氣も遠く沈む耳に、奥深く遙かに傳はると、枝に響いて櫻に揺れて、床しく、清く、チリ、チリ、リン、コロ／＼と、響きの音か、琴の音か。

花の香誘ふ、しめやかな、爽かな風が颯と來た。梢の雲は靨黷くばかり。

留南奇の薫のばツとするのが、清涼剤のやうに面

を打つた・・・背後に近い、一ツ目の鳥居のあたりで、衣擦れの音がしたと思ふと、軽い足音が、はたと留まつて、清しく、優しい、女性の聲で、
「お爺さん、お爺さん。」
と二度呼んだ。

格子の扉が、御堂の内から、ギイと開いて、

「おゝ、お姫様、お遊びか、なう。」

と先刻の翁の聲がする。

「御門まで立寄りました　あの、用意は最うし

ましたかい。」

「御覽ぢやれ、それ、此の通り。」

と殿井を指す趣きで、聊か嘲つた調子を含んだ。

ト背後から、柱を楯に、此方を見透かす氣勢がした時、半ば喪心した殿井は夢のやうに、あの、行燈の薄明りで、端麗に美しい襦のあたりをちらりと見た。
…

鳥居がくれに花の蔭から、かさねて聲して、
「それは違ひました・・・お米を狙ふ男には、

来る時、三念坂を上るのに逢ひました、あれは些と
後れてから此處へ來ます。」

「何と、人違ひ。」

とひたと乗出し、御堂の端から殿井の目の前へ出
した顔は、以前とは肖もつかぬ、能の面の柔和な翁
で、

「したり．．．．．」

と膝のあたりを、己が手で丁と拍つた。

「これは、さても沙汰の限りな。いや、唯今、祈
戻さう。．．．．．お姫様、先づ此へ。」

「鈴の音ゆゑ急いで來ました、更めて花見に參ら
う。．．．．．まあ、さらば．．．．．」

「されば、待ちます。」

櫻がさら／＼と皆揺れる。

「客人、まづ、其の顔を、」

と翁が言ふ時、凡そ十四五挺、向つた寶珠の枠に、
蠟燭がばつと珠なりに燃え立つと、萬燈の如き御堂

の明に、正面の姿見が々と輝く裡に、衝と映つたは、蒼ざめて、黄色な、獸の如く鼻の尖つた、赤たぐれの目の引釣つた我顔で。

「あつ、」と殿井は尻餅支く。

「憂慮ない、面ぞ、脱がせう。」

と翁が云ふ時、ヒヤリと掌が顔を撫でる、とすつきり身體中清しく成つたが、忽ち四邊は暗夜に返つた。

「堂守、老眼に確とも見極めいで、なう、迷惑を掛けた、恥かしう存じます。豫て……あの、可愛らしいお米を附廻す曲ものがあつて、なう、それ、附手紙などは言はずともぢや。種々に手を盡すが、さて、天人に紙礫、一向に手答のない處、あの娘の父親が、世を去つたに附入つて、計を企んだわ。

桂庵の悪婆を頼んで、此を先づ、其奴が母親と拵へた。

何と、此の前の縁日の夜の事よ。お米は例の他愛

もなう、最惜いとやの、境内けいだい馴染なじみの親仁おやぢから、色入いろいれの甘かん露糖ろたう、千代紙ちよがみを浸ひたしもの、體ていに刻きぎんで、附木板つけぎいたに載のせたを買かうて、嬉うれしさうに手てに提さげて、裏町うらまちを歸かへる處ところを、其その曲くせものから頼たのまれた、右みぎなる桂庵けいあんの口入くちいれ婆うば、暗くらがりで、あの娘むすめの袖そでを引ひくと早はや、先まづ、それ、大地たいぢへ平伏ひれふして、さめ／＼と泣ないた、なう。

身みにも世よにも代かへられぬ、唯一たゞ一人にんの悴せがれが、姉あねさまゆゑにこがれ死じに死しにまする。婆ばあと二人ふたり、生命いのちを助たすけると、思おもひ汲くんで、又またとは言いはぬ、一度どだけ、逢あうて遣やつてくれい、と拝をがむ。

巧たくんだな。

優やさしい、あの娘こぢや。

分わけて、片親かたおや失しなうて、袖そでもまだ乾かわかぬ折をりよ、我身わがみが戀こひしく親おやなつかしい情じやうにせまつて、そんなら、とそれ約束やくそくした。

其それが今夜こんやよ。

逢あうて、いざ、何なんと成なる。．．．其それまでも

考へまい。

清い身に怪我させまい、と餘りのいぢらしさに、
われら面々、一ツ堂に落合うたが、なう。

人の口から、兎や角のうちは知らず、先づ逢はう、
とあの娘が、心動いての上なれば、夢枕にも、前兆
にも、悪いと留めても思直さぬ。

恚やうな事は、なう、正面から留めれば意地を尚
ほ張るもの。

よつて、其の、曲ものゝ、若い奴、約束の場所に
した、此の堂へ来るを待つて、一眠らせ、當て身を
くれて、――客人知つたな、――今の怪しげな
面を被せて、人目を忍んで何も知らず、罪もなく犠
牲に成りに来る娘に、其の面見せう……
一目見て倒れもせうが、やがて、可恐しい夢は覺
めて、朝機嫌に又例の可愛い酸漿を鳴らすであらう、
となう、最前よりの仕儀であつたよ。

粗相は、老人詫申す。が、よい次手ぢ

や……やがて、娘も此へ參らう。其の路は裏
門ぢや……客人、途中に待うけて、此の趣言

ひきかし、お米を納得さして歸さうなれば・・・
蟲も出やうぞ、可哀げに、可恐いもの見せずみに濟すむ
な。

夜も更けた、花も眠らう・・・

然らばぢや、客人よ。と二句ばかり、氣高
く巖かに聞えた、と思ふと寂寞した。

鳥居をかけて、花の梢が、ひた／＼と御堂を包む。

獨りおのづから威儀正しく、三たび禮拜して鳥居
を出て、衝と路を裏門の方へ取つて、境内を辭する
時、怪しや、其の時まで消残つた行燈から、赤い酸
漿の繪が三ツ、斜めに並んだなりで、葉を羽に、蜻
蛉のやうに、翻々と抜けて出て、櫻の中を縫ひなが
ら、板塀、垣根、ちら／＼と裏町へ送つて出たが、
ひよい、と前へ飛んで、前途へ、ほた／＼と紅に點
灯れて行く・・・
其方に、其方に、鈴か・・・否、カラコロ、
カラコロと響く音。夜を遊行する、先刻の姫か、誘
き出されて來かゝる、お米か。

【完】